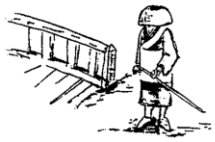
今昔物語 第53話

メノコ橋の話

（野崎3丁目）

水道局東部配水場東側の道路端に、「メノコ橋」と銘のある石橋が、欄干だけ残っています。この橋には次のような話が残っています。

弘法大師がまだ若いころ、修行地を求めて、連日山野を歩き巡っていました。ある日、この里に入った時に、日が暮れてしまいました。弘法大師は見知らぬ家の前に立ち、一夜の宿りを頼みましたが、その姿を怪しんだ家の主人は、宿を貸してくれません。弘法大師は仕方なく、村外れに架かる橋の上で寝ることにしました。来る日も来る日も、同じことを繰り返し、10日程この里にいました。この僧が、弘法大師であると里人が知ったのは、数年後のことです。



いつとはなくこの橋は、僧が寝ていたので「ネノコ橋」と呼ばれるようになり、ネノコが転じてメノコになったと言います。

メノコ橋の架かるこの道は、東高野街道と呼ばれ、老若男女が高野山へ、京の都へと通った道です。

今昔物語 第54話

深野池の生い立ち

宝永元（1704）年に大和川が付け替えられるまで、大東市域には深野池という大きな池がありました。この池にはこんな生い立ちがあります。

今から6千～7千年前、河内平野は、生駒山麓まで広がる大きな湾だったようです。それが、淀川や大和川から土砂が運び込まれて、徐々に陸地化されました。古墳時代には広大な池になったと思われます。

『日本書紀』の「仁徳記」には、「河内平野には湖沼が多く、田畑は少なく、川が縦横に流れ、ひとたび長雨が降れば、海水は逆流して溢れ、村々は水に浸かり船に乗る。」とあります。池には蓮が生い茂り、『古事記』の「雄略記」に

日下江（くさかえ）の　入り江の蓮（はちす）　花蓮
身の盛り人　羨（とも）しきろかも

（日下江の入江に蓮の花が咲いている。花盛りの蓮のように、今を盛りと咲きにおう乙女たちを見れば、老いたわたしには昔のことが思われて羨ましいことです）という歌があります。

この日下江は、後の深野池と新開池を含む大きな池と思われますが、やがて、更に土砂が流入して2つの池に分かれることになります。